

2

その日、朝七時過ぎに優人は俺の家に来た。

少し早い時間だったが、休日のその時間なら誰かに見られるということもあまりないだろうし、何よりシリーズ第一作から第六作まで全部観るなら軽く十二時間以上かかる。ぶっ続けで見ても、夜の七時は回るだろう。

「いいのか、遅くまでいても」

「今日、親いないし。泊まっても大丈夫だよ」

「そうなんだ」

俺は心の中で指を鳴らして喜んだ。

「昨日から十日間いない。アメリカ行ってるよ」

「お前を置いてか？」

「うん、お仕事だし」

(そういうものなのか)

俺の顔を見て、優人は付け足した。

「毎年こうだよ。その間一人でももう慣れたし、今年は健吾さんとこで映画観れるし」

法律事務所の仕事ってのは、そういうのもありなのかどうか

かは分からない。優人の親の事務所だけの、何らかの事情なのか。まあ、どっちにしても、それだけ時間があれば、いろいろと楽しめるってものだ。

「じゃ、全部見られるな」

とはいえ、最初から俺はシリーズ全て観せるつもりはない。たぶん優人もだろう。だが、俺と優人の考えていることは違う。優人は恐らくAVを観たいだろうし、俺は……

とにかく、優人を家に招き入れて、地下のミニシアターに連れて行く。その地下室には、壁一面に固定型のスクリーンと、天井に設置したプロジェクター、スクリーン左右に結構大きいスピーカー、部屋の後ろにサラウンド用スピーカーが三つ設置されている。

「うわあ、すごい」

優人は少し驚いた。こんな家に結構な設備だ。更に部屋の中央にソファと小さなテーブルが、壁側には小さい冷蔵庫も置いてある。ソファで座って、冷蔵庫に入っているジュースでも飲みながら、という訳だ。

「何か飲みたい物あるか？」

冷蔵庫を開けて、その中を優人に見せる。

「えっと、コーラ」

思った通りだ。あの『春祭り』のときも、優人はコーラを

飲んでいた。他にも色々あつたのにコーラを選んだのだから、きつと好きなのだろうと思っていた。少量残ったコーラのペットボトルのキャップを開け、グラスに全て注ぐ。少量が少ないと思ったので、新しいペットボトルも開けて、グラスに継ぎ足し、優人の前に置く。

「ね……あれ、観てもいいの？」

少し小さな声で言う。

「AVか？」

俺は、はつきりと言った。

「……うん」

(男の子だなあ)

内心ニヤニヤしながら、でもそれは外には出さずに答える。「遅くなくてもいいなら、夜になってからだな」

そして、俺はシリーズ第一作のブルーレイを再生した。

優人はソファに座って、食い入るように観ている。本当に、ずっとそんな姿勢で疲れないのかと思う程に前のめり気味で観ていた。少年の目が映像を反射してキラキラと輝いている。俺は優人の横に座って、その目をずっと見ていた。テーブルに置かれたコーラは半分くらいになっっているが、この一時間ほどは全く減っていない。それくらい、優人は映画に釘

付けになっている。

一作目が終わると、優人の顔は興奮で少し紅潮していた。テーブルの上のコーラを一気に飲み干す。俺は冷蔵庫の中からコーラのペットボトルを取り出し、そのままテーブルに置く。優人がコーラをグラスに注いでいる間に二作目のブルーレイを準備する。

「トイレ、大丈夫か？」

地下室にトイレはないので、一応促してみた。

「大丈夫」

それだけ言うと、リモコンのプレイボタンを押す。二作目が高音響とともに始まった。

が、優人はそれを最後まで観ることは出来なかった。コーラに入れておいた睡眠薬が効いてきて、二作目の開始から三十分程でソファに横になり、ぐっすりと眠り込んだ。

俺はブルーレイを停止し、部屋の正面の壁に取り付けられていた固定スクリーンとスピーカーカーを外し、分解して片付けする。固定スクリーンが取り付けてあった壁には、スクリーンを固定するためのフックが上の方に三個と下に二個。スピーカーカーを固定するためのフックが壁の左右の隅の上下に二個ずつあった。

バラした固定スクリーンとスピーカーカーを二階まで置きに行く。そして、大きなカバンを地下室に運び込む。上階に戻ってノートパソコンを持って降りる。優人はぐっすりと眠ったままだ。もう一度戻って、今度はブルーシートを持ってくる。優人が寝ているソファごとずらして、部屋の前半分にブルーシートを敷く。壁の方は折り返して、ブルーシートの端にある穴に紐を通し、スピーカーが吊ってあったフックの下の方に結ぶ。正面の壁の下の方から床の半分くらいまでがブルーシートで覆われた。ソファをブルーシートの手前ギリギリの位置まで戻す。カバンの中から鎖を取り出し、スクリーンを外した後の五つあるフックの上段真ん中に取り付ける。その鎖を力任せに引っ張ってみる。びくともしない。これなら大丈夫だ。

眠ったままの優人を抱きかかえ、正面の壁の下、ブルーシートの上に横たえる。カバンの中から首輪を取り出し、それを優人の首に付ける。首輪は金属製で、優人の首回りには少し大きいのが、扱ははしない。首輪の端と端を優人の首の後ろ側で合わせて、穴に金具を入れて、金具の穴に南京錠を通す。南京錠に壁の鎖の先端も通して鍵を掛ける。これで南京錠の鍵を外さなければ首輪も取れないし壁の鎖からも外せない。優人の手を背中に回し、手枷を嵌める。そこいらのSMシヨ

ツプで売ってるような玩具じゃなく、アメリカから個人輸入した鉄製の物だ。幅四センチくらいで厚みは五ミリ以上あり、ずっしりしている。手枷の内側には革が貼つてあり、長時間着けていても体に傷が付きにくくなっている。左の手枷に五十センチくらいの鎖を通して南京錠を掛ける。鎖の先端を別の南京錠に通してそれで右の手枷を固定する。少し考えて、手枷の鎖を首輪の後ろの金具にフックで固定した。これで優人の手は頭の左右で少し動かせる程度に拘束される。ソファを後ろに下げ、そこに三脚を立てる。三脚の上にビデオカメラを据えて、優人に向ける。

(まあ、こんなもんか)

俺はソファに座り、ブルーレイプレーヤーの音声出力切換ボタンを押して、部屋の後ろのサラウンド用スピーカーから主音声が出るようにする。再生ボタンを押して、正面の壁に映画の続きを映し出す。固定スクリーンよりは若干見づらいが、優人が目覚めるまで俺は映画の続きを楽しんだ。

「うう」

優人が呻いた。俺はブルーレイを停止する。

「目が覚めたか？」

立ち上がったって、優人に近寄った。優人は寝ぼけ眼で俺を見上げる。

「あ、あれ……寝てた？」

そして、首輪と手枷に気付く。

「なに……これ」

立ち上がろうとするが、手が自由にならないのでなかなか立ち上がれない。首輪に鎖が繋がっていることにも気が付いたようだ。俺は何も言わずに優人の頬を両手で押さえ、その唇にキスをした。

「うう、何するの」

優人は顔を背けようとする。しかし、俺はしっかりと頬を押さえつける。

「や、やめてよ」

口を離す。優人は袖で唇を拭おうとするが、思うように手が動かせないでいる。

「なに、これ」

改めて手枷と首輪について、俺を見上げながら質問する。

「今日からお前は俺の奴隷になったってことだよ」

「え？」

理解出来ないようだ。当たり前だろう。

「お前は俺の物になったってことだよ」

少し考えて、冗談だとも思ったようだ。

「寝ちゃったのはごめんさい。もう、これいいから外してよ」

眠ってしまった罰だとも思ったのか、そう言つて手枷に拘束された手を動かす。

「これは罰ゲームでも冗談でもない。もちろん夢でもない」

俺は優人の顎を掴んだ。

「やめっ」

優人の膝が俺の太ももに当たる。

「ああ、足、忘れてた」

俺は優人の股間を膝で蹴り上げた。優人がしゃがみ込み、床で丸まった。カバンから足枷を取り出す。形は手枷と同じだが、一回り大きい。それを優人の足に嵌めていく。手と同じように左右の足枷を三十センチ程の短い鎖で繋ぐ。

「やめてって」

優人はようやく本気で抗ったが、すでに遅い。足枷を着け終えた俺は、優人から少し離れた。優人は俺に近づこうとして、両足の足枷の間の鎖に足を取られて一瞬蹠踉ける。しかし、体勢を立て直し、少しずつ俺に近づく。俺も少しずつ後退る。やがて、優人の首輪が鎖に引っ張られ、それ以上は俺に近づくことが出来なくなる。床に敷いたブルーシーートの端

から一メートル内側つてところだ。

そこから俺に抗議する優人に背を向けて、カバンからハサミを取り出した。

「な、何するの」

ハサミを見て、優人が少し怯える。俺は何も言わずに優人の首輪を掴み、彼が着ていたパーカーのジッパーを下ろすと、その下に着ていたTシャツをハサミで切り裂いた。

「何すんだよ!」

優人が体をひねる。しかし、首輪を掴まれているため、思うように動けない。俺はわざとハサミの先端を優人の腹に押し付ける。

「ひっ」

一瞬の痛み。しかし、別に切れてもいないし大したことはない筈だ。それでもそれなりの効果はあったようだ。

「動くとお前の体に突き刺さるぞ」

あるいはどうせTシャツは破れたのだから、とあきらめたのだろうか、大人しくTシャツを引き裂かれる。今度はパーカーにハサミを入れる。少し暴れるが、さっきのようにハサミの先を押し付けると大人しくなる。優人の上半身は、ほとんど裸の上に切り裂かれた布がまとわりつくだけの姿となった。